

様式 1

研究報告書（平成 25 年度）

提出者 宮本和歌子

提出年月日

【本ユニットにおける研究テーマ】

和文 江戸川乱歩「赤い部屋」の構造

英文 The structure of EDOGAWA Ranpo's *Akai Heya*.

【研究のねらいと目的】（600 字程度）

江戸川乱歩の短編作品「赤い部屋」の成立背景に、どのような他作家の作品が存在しているのかを探る。谷崎潤一郎の「途上」において描かれている、絶対に法に触れる気遣いのない犯罪という着想が、「赤い部屋」で言及されている様々な犯罪法のアイデアの元であるとされている。

しかし、「赤い部屋」は、刺激を求める人々の秘密会合において、ある新入会員が話す不可思議な殺人方法を聞くという体裁をとっている。刺激を求める人々、会合が行われている場所が、赤い装飾が施された室内であるという二点について、考証を行う。

【研究業績】 学会報告・論文など

科学研究費助成事業 若手（B）取得

【成果の概要】（800字程度）

江戸川乱歩の「赤い部屋」における、日常生活に退屈を感じ、刺激を求めている人々とは、宇野浩二の童話集『赤い部屋』収録の「生命の革」の登場人物、自分の寿命を縮めてでも退屈な日常を脱却したいと願う男を意識していると考えられる。このことは、江戸川乱歩が宇野浩二の作品を愛読していたことや、タイトル自体も、同童話集と同じであることから容易に推測できる。しかし、江戸川乱歩の「赤い部屋」がこのようなタイトルを付されたのは、宇野浩二の同名の童話集の存在のみに依るものとも言い切れない。江戸川乱歩の「赤い部屋」において、主要な構造を担っているのは、宇野浩二の作品に依っていると考えられる、日常に退屈を感じ刺激を求める人物、谷崎潤一郎「途上」に依っている、絶対に法に触れる気遣いのない殺人法、の二点だけではないからである。江戸川乱歩の「赤い部屋」では、作品の結末において、赤い装飾の部屋に電灯が点されることにより、それまでの重厚で不気味な雰囲気全て払拭され、俗っぽくつまらない部屋へと印象が転換したことが書かれている。また、部屋の印象が転換すると同時に、世にも奇怪な殺人法と信じて聞いていた話が、全て架空の作り話であったとも明かされている。想像を超えた殺人法に対する信憑性や聞き手の評価は、それが語られている室内装飾が人々に与える印象と一致している。聞き手が存在する環境が、語られる話の内容に及ぼす影響という点において、江戸川乱歩はさらなるアイデアの元を有していたと考えられる。以上の内容を、論文として現在作成中である。

【通信欄】